

	提 案 名	提 案 団 体 名	
		代表者氏名	所 属
7	宇都宮が変わる瞬間 - 自動車社会からの脱却 -	宇都宮大学 SANCT	
		中村 直樹	宇都宮大学大学院 工学研究科
			指導教員 氏 名 森本 章倫

1 . 提案の要旨と目標

都心部の衰退が社会問題として議論されるようになって久しいが、いまだ抜本的な解決策は見出せていない。特に多くの地方都市の中心部は「シャッター街」と呼ばれ、商業活力の低下とともに商店街を歩く人が激減した。原因の一端は過度なモータリゼーションの進行にあり、自動車型社会の進展の浸透に伴い郊外部でスプロール化が進展した。また、それにあわせて公共公益施設や商業施設も郊外への立地が相次いだ。特に 2000 年 6 月に施行された大規模小売店舗立地法は、商業の需給調整を撤廃し、郊外への参入についても周辺環境等の一定の条件が満たされれば自由競争の中で立地を可能とした。これによって農地や市街化調整区域までもが大規模小売店舗の立地対象となり、都市の商業環境は大きな転換期を迎えた。

このような状況の中、日本有数の自動車依存型都市であるといわれている宇都宮市では、日々慢性的な渋滞に悩まされている状態にもかかわらず、自動車で移動せざるをえない交通ネットワークが出来上がっている。このままの状態を放置し自動車に依存し続けると、交通渋滞による環境負荷の増大、低密な道路ネットワークの維持費の増大、少子高齢社会への対応の遅れなどの様々な問題が懸念される。

この対応策として自動車社会からの脱却を図るために、私たちは「交通」、「土地利用」、「人の意識」の 3 つの面からの解決策を提案していく。

自動車に依存した交通体系では多くの箇所渋滞が発生する。そこで、「交通」の面からは、自動車交通の減少により都市内の渋滞が解消される様子を視覚的に表し、渋滞解消と公共交通発達のメリットを PR する。

「土地利用」の面からは、宇都宮市の郊外の大型商業開発に着目する。郊外の大型店舗への来店交通手段の 97% は自家用自動車に依存している。そこには、実際に郊外の大型店舗までのバス路線がないわけではないが、認知度が低いという問題がある。そこで、視覚的な表現を用いて、郊外大型店舗への公共交通利用を呼びかける。

「人の意識」の面からは、みんなが自動車に頼った生活をしていると、環境問題や交通事故などの社会問題から健康や経済などの個人的な問題まで、様々なデメリットが潜んでいることを PR する。

このような問題は、それを市民が理解することも重要であるが、現段階ではそのような取り組みはあまり行われていないのが現状である。そこで、本提案では市民の方々にこのような問題を身近に感じて頂くため、web による情報提供の提案を行う。